

荷（いやし）くも四方（よも）の志（こころざし）をなせば

奨励	宮庄 哲夫【みやしょう・てつお】
奨励者紹介	同志社大学文学部教授 【研究テーマ】宗教哲学

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

（ヨハネによる福音書 3章16―17節）

1864年6月14日、22歳の新島は函館からアメリカに脱国しました。今日は2014年6月11日ですから、ちょうど150年前ということになります。新島の時代の、いわゆる太陰暦と現在の暦とはほぼ一月ほどずれがあり、現在の暦で正確に申しますと脱国の日は1864年7月17日になります。しかし、新島の日付の意識では6月で手紙や日記を書いていますから、細かいことにはこだわらず、今から150年前の6月ということでお話ししたいと思います。

さて、新島は150年前どうして函館にいたのでしょうか。詳しくは昨年2013年3月に出た岩波文庫の『新島襄自伝』、新島が自伝を書いた訳ではないですが、主に日記や旅の紀行文、メモなどを年代順に編纂して46年11カ月の新島の濃密な人生を再構成したもので、現代表記の日本語で読めますからお薦めします。

未知の世界へ

必要なポイントだけ紹介しますと、新島は17歳で当時の藩士のならいとして父親の仕事「祐筆職」（藩の文書やいろいろな記録の作成をする書記のような仕事）に就きますが、14歳から始めていた蘭学・オランダ語を通してヨーロッパ諸国の事情を知りたいという思いが少しずつ膨らんでいました。新島はどうも狭い部屋に閉じこもってひたすら文書を作成するだけの仕事には、余りというより全く気乗りがしなかったようで、仕事を辞めたくて「しばしば家出の計画を立てたが、それを実行に移すほどの勇氣はなかった」と述懐しています。皆さんはどうでしょうか。私もそうでしたが、若いときには当てもなく「家出して自由になりたい」なんて気持ちになることがあります。でも、新島が続けて書いているように「自分の家に非常に愛着があり、両親や祖父を深く悲しませたり、彼らに不名誉を与えたりするのではないか、と懸念」して、普通は家出を思いとどまるものです。ここでは、新島も私たちと余り変わらない普通の青年だったと言えるでしょう。

そんな新島に一つの転機が訪れるのが18歳のときです。江戸に開設されたばかりの幕府の軍艦操練所（そこで勝海舟と出会い、勝は後の英学校の創設に助力することになります）で数学や航海術を学ぶことで、外国への関心がより明確なものになっていったことです。今日の題にあります「四方の志」、すなわち「外へ、世界へ出て行こうとする志」が芽生えたと言えるように思います。やがてそれは江戸から岡山の玉島（現在の倉敷市）という港までの3カ月ほどの西洋式帆船、快風丸での航海によって具体的なイメージをもち始めます。20歳になっていた新島は「私が青春時代のすべてを過ごした安中藩主の正方形の囲い地（江戸藩邸）——そこでは、天というものが四角形で切り取られたほんの小さな区画でしかない私は思っていた一からはるか遠くに行けたのは有益なことだった。（中略）この航海によって私の精神的な視界は、明らかに大きく広げられた」と述べております。自分の意に沿わない、嫌いなことを逃れるために何度も家出を考えていた青年が、未知の世界へはばたくことへの希望の光を見いだしたのです。

「天父」に仕える

この航海が若き新島の大きな転機だったとすれば、江戸に帰った新島が英語の辞書や文法書を手に入れて勉強し始めたことや、とりわけアメリカの地理・歴史の書である『連邦志略』を読んで（I was wondered so much as my brain would melted out from my head）「脳みそが頭からとろけ出そうになるほど驚嘆した」と書かせたカルチャー・ショックは、四方の志を大いに刺激したことでしょう。そしてこのころの新島にとってもう一つの驚きがキリスト教との出会いでした。当時もちろんご禁制のキリシタンではありましたが、漢訳された聖書や聖書物語の小冊子のようなものが密かに流布していたようで、坂本龍馬も読んでいたと言われていいます。このとき新島も漢訳聖書を読んでいますし、友人たちと聖書の読書会のような集まりを開いて、キリスト教について語り合ったという資料もあります。そしてとりわけ漢訳聖書の「天父（Heavenly Father）」の二文字に心を動かされキリスト教の「神に對していっそう畏敬の念を持つようになった」と述べています。

このころを回顧して「これらの書物すべてのおかげで、生まれてから二十年間、見えなかったものがいくぶんかすかに、私の心の目に見えるようになった」と記していますし、さらに、「私はその時、自分自身の道を進まなければならないと感じた。私は地上の両親よりも『天父』に仕えなければならない。この新しい考えが私を力づけてくれたので、藩主を捨て、家や祖国を一時離れる決心ができた」とも述べています。これは大変な決心でして、当時の通念からは到底理解してもらえないどころか、不屈者として処罰されかねない事態です。このような決断が、まだほんの表面的な淡いキリスト教との出会いを通して新島の心を動かし始めていた、ということです。ここで引用しました新島の言葉は、先ほど紹介した岩波文庫の『新島襄自伝』に翻訳で収められていますし、英語の原文は『新島襄全集』7巻英文資料編で読むことができます。

チャンスは意外なところから、全く偶然なのですが、あたかも準備されていたかの如くにやってきました。1年半前、新島の転機になった江戸から玉島往復の航海に乗船した船が、今度は函館に行くことを、その船で知り合った友人とたまたま江戸の町中で出会った際に知る訳です。そのとき新島の頭に「この機会を逃してはならない。そこから外国への脱出を試みるのだ」という考えが稲妻のようにひらめいたと記されています。新島の脳裏には、先に引用しました、もはや藩主も家も捨ててでも国を出てアメリカに行こう、という決心が実現に向けて即断即決されたのでしよう。すぐさまその手はずを整えるために奔走し、藩主からの許可を得て、5日後には新島の姿は函館に向かう船上にありました。1864年3月12日のことです。このとき新島22歳、およそ一月の航海で4月21日に函館に到着し、その2カ月後彼は函館からアメリカに向かうことになるのです。

新島の変化をヒントに

ざっと見てきました18歳に始まる軍艦操練所での勉強から20歳での転機、そして22歳の函館行きまでの時期は、ちょうど皆さんの大学生活に重なる時間です。封建時代とは違うとはいえ、先ほどふれましたように、与えられた人生や世間の仕組みに不満を抱きつつ、家出を考えてみても、家族のことを思うと、あるいは世間体を考えてと踏み切れない、もどかしさ、弱さ、うだちのなかにあるという若さゆえの感覚は、なんとなく共有できるものがあるかと思います。新島の表現を使えば、藩邸で見続けた青春時代の小さな四角い空（a little square patch）に象徴される狭い閉じた世界からどう脱出するかです。新島はそれを新しい知識の吸収に求めました。軍艦操練所での18歳からの2年間は、彼の言葉によれば「二年間、猛勉強をした結果、私は算数、代数学、幾何学をやり終え、また航海術の基礎理論をも修得した」勉強に集中したときでした。夜の勉強で目を悪くしたほどでした。新島になにより驚かされるのは、事には彼の周到な準備とそれに遇進する集中力です。先に述べた函館行きのチャンスに巡り会った際にも、瞬時に彼はその船の持ち主の松山藩主に乗船を願ひ出る策を考え、そこから自分の安中藩主に許可を得る作戦をたてます。そして即座にその段取りを実現すべく奔走します。まさにアイディアと実行力の勝負です。その点同じ密航でも、バリーが日米和親条約締結のために再度来たときに、無謀にも停泊中のアメリカ船に乗りこんで密航を訴えて拒否され捕らえられた吉田松陰とはまったく違うメンタリティーというか精神構造だったと言うべきです。新島の面目ここにありますが、私が言いたいことは、このときの新島とほぼ同じ年代の4年という時間を同志社大学で過ごす皆さんに、こうした新島の変化が何かヒントにならないか、という願いです。4年の大学生活は、就職して社会に出ていく大多数の学生さんにとって人生最後のまとまった自由な時間でしょうから、それをどう過ごすのか、それを土台にどういう人生をクリエイトするのか、そのヒントになるものを見つけることはできないだろうか、ということです。

函館の出会い

ところで函館での2カ月も少し見ておきたいと思います。函館に行く表向き理由であった武田斐三郎（大坂の緒方洪庵の適塾の塾頭、後に東京大学の源流となる幕府の開成所教授、函館の五稜郭の設計・建設にあたった学者）の塾に入塾するも、武田が江戸に出て不在で外国人との接触を得るため、ちょうど日本語教師を探していたロシア正教の司祭ニコライのところに寄宿することになります。少し脱線しますと、このニコライのところであの幕末の志士、坂本龍馬の従兄弟、山本数馬（当時訳あって函館に来て、神社の婿養子になって沢辺数馬と名乗っていた）と出会っています。実は、函館からの新島の脱国に直接手助けをした、つまりアメリカ船の船長に密航を頼んでくれた福士卯之吉という人物が有名ですが、この福士を新島に引き合わせたのが沢辺数馬でしたから、龍馬の従兄弟が新島の脱国を可能にしたとも言えるのです。新島が記しています。「沢辺数馬（さわべかずま）〔琢馬（たくま）〕、富士屋宇之吉の周旋に依りてこの行を得たり。この二友、骨に徹し忘るべからず」と。折しも京都ではこの6月5日にあの池田屋事件が起こります。長州藩や土佐藩などの尊皇攘夷派を新撰組が襲撃した事件で（いわば新撰組が幕末の京都にデビューした事件です）、これによって蛤御門の変が起こり、勤皇佐幕の対決が激しくなりました。かつて新島を紹介するあるテレビ番組で、坂本龍馬や桂小五郎など幕末の勤王派の青年たちを「彼らは国を変えるために命をかけた」、しかし新島は「国を出るために命をかけた」とバラフレイズしてしまして、なかなかうまいこと言うなと思ったものです。時代の一大転換期にあって、龍馬も桂も、近藤も土方も、そして新島もですが、新島は弟に宛てた手紙で自らの脱国をして「少年の狂気牽制し難く」と書いていますけれども、そう言わざるをえないような熱情がこの時代の若者を動かしていた、ということだったのでしょうか。京都からはるか遠い函館の地で、少年の狂気と言わしめた脱国劇に、龍馬の従兄弟が関わっていたというのも興味深い事実です。

よく知られているエピソードに、開国論者の勝海舟を斬るために訪れた龍馬が、逆に世界情勢と海軍の必要性を説かれてその場で勝海舟の弟子になったという話がありますが、実は新島の脱国を助けた沢辺数馬も、神道の宮司として異教であるロシア正教の司祭ニコライを殺そうと訪ねて話をする間に、キリスト教信仰にふれて日本最初のロシア正教の信者になり、さらに日本人最初のロシア正教の司祭になったという後日談があります。なぜかはよく分かりませんが、多分、真剣に人生を求める生き方がそうした逆転劇を生みだす、ということではないでしょうか。

四方の志を写す

ところで、本日の題にしました「苟くも四方の志をなせば」ですが、これは6月14日脱国の当日、父新島民治宛に書いた手紙のなかにある言葉です。その2日前の12日にアメリカ船に乗船できる約束が確かなものとなって、慌だしく準備するなかで、前日の13日に新島は当時としては極めて珍しい写真を撮影しています。その写真を手紙と一緒にして、友人に託して家族に届けようとしたものです。青年新島のちょんまげ姿の肖像画を見ることがあるでしょうが、それはこの写真を元以後で描かれたものです。いずれにせよ、その夜に密航する当日に書かれた手紙ですから、失敗したら死罪、成功したとしても帰る当てもない今生の別れを覚悟した、遺書に近いものと言うことができるでしょう。

手紙の文面では「男児苟くも四方の志をなせば、須（すべか）らく其身を写し、家郷へ遣すべし」となっていますが、要するに世界に出て行こうとするなら、写真を撮って家に送るべし、とニコライさんに言われたので、そうします、ということになっています。が、ここでも先にお話したような、事を為すに当たっての新島の周到な用意を読み取ることができます。密航するとは書けない手紙で、しかし貴重な写真を撮って送る。そして「何卒此写真を御眺め下され、私事朝夕御膝下に罷在り候様思召し」つまり、四方の志をもって遠くに旅だったことを知らせると同時に、写真を見て私が家族の元にいるように思って欲しい、と家族の心配を慮る心遣いをしているのです。

一大事をなすときにも見せるこうした新島の振る舞いから、たぶんいろいろな事を学ぶことができるように思います。吉田松陰のような無謀さではなく、それなりにしっかり準備をし、計画を立て、しかしいざとなれば全力で事に当たる、そんな生き方をこの青年時代の新島に見ることができると思います。

福音書のエッセンス

さて先ほど読んでいただいた聖書の箇所は、新島が神学校の卒業の直前1874年5月10日、牧師としていわばデビューする最初の公の礼拝説教をした際に使った聖書のテキストで、英語で書かれた説教の完全原稿が先に紹介した『新島襄全集』7巻の英文資料編にあります。この聖書の箇所は宗教改革者ルターが聖書のなかの聖書として「小聖書」と呼んだ、最も有名な聖書の箇所と言われてきたものです。新島が牧師として出発する最初の説教にこの箇所を選んだのは、説教中の表現を借りれば、「この聖句は福音の真理の神秘を美しく解き明かすもの」であり、「福音書のエッセンス」だからということです。それはキリスト教で「なぜ神は愛する御子をさえ惜みせずにこの世にお与えになったのか、またいかなる条件の下でなら、この罪深い人類は永遠のいのちを得ることができるのか」という問題を、はっきりと説明する」エッセンスがこの聖書の箇所にあるという確信に満ちた説教になっています。ここで私が新島の説教の内容や聖書の解説をするつもりはありません。この聖書の箇所は文字どおりそのままで聖書の真理を示すエッセンスでありますから、言葉を付け加えることも、割り引くこともできないテキストだと思います。新島が国の法を犯してでも求めようとしたキリスト教の真理がここにあるということ、キリスト教を正式に勉強し、そのキリスト教を伝道する者として出発するに際して告白したのだと言えるでしょう。

10代の終わりに聖書にふれた新島は「私たちが住んでいるこの世界が、神の見えざる御手により創造されたのであって、単なる偶然によるものでないことを知った」ことと、その創造主なる神が「天の父」であると受け入れたことによって「『僕はもはや両親のものではない、神のものだ』と心の中で言った」と述べて、ある意味、信仰告白的な決断をしています。しかし、このときのキリスト教との淡い出会いが、ゲーテの「若きヴェルテルの悩み」ならぬ青年新島の悩みに希望の道を示し、天なる父のもとにある新しい世界の知識と、キリスト教をきわめるために四方の志を抱かせるに至った、ということができると思います。

同志社大学で学ばれている皆さん、家出願望の少年が四方の志をなすに至った契機をヒントにして、ぜひ広く羽ばたいてください。

同志社を学び、知る「同志社スピリット・ウィーク2014」のチャペル・アワーでしたので、この6月、ちょうど150年になります新島の脱国に因んだ話をさせていただきます。

〔参考文献〕
同志社編『新島襄自伝』岩波書店 2013年
同志社編『新島襄の手紙』岩波書店 2005年
同志社編『新島襄書簡集』岩波書店 1954年
新島襄全集編集委員会編『新島襄全集7（英文資料編）』同朋舎出版 1996年

2014年6月11日 同志社スピリット・ウィーク春学期
京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録